

豊かな心をはぐくむ活力ある学校づくり

－学校の環境分析を通して－

川西町立唐院小学校 教頭 篁 園 充 信

Takesono Mitunobu

要 旨

本校は自然環境に恵まれ、子どもたちはのびのびと学校生活を送っている。このよさを伸ばし、地域の人々とのふれあいや遠隔地の学校との交流を通して、人の温かみが実感できる学校づくりについて考察する。また、教職員が意欲的に教育活動に取り組んでいけるように、学校組織の見直しや学校の自己評価の在り方についても考える。

キーワード： 活力ある学校づくり、豊かな心、学校組織、環境分析、交流活動

1 はじめに

本校は奈良盆地のほぼ中央に位置し、周囲を水田に囲まれるなど、豊かな自然環境に恵まれ、創立130年以上の歴史をもっている。保護者は、「自分の考えがはっきり言える子」「賢く、思いやりのある子」になってほしいという願いをもっている。そのため、学校としては豊かな心をもち意欲的に学習に取り組む子どもの育成を目指している。

一方、子どもたちは落ち着いた学校生活を送っているが、大勢の人とかかわることが少なく、日常の諸問題の解決に前向きに対処していくことに消極的である。

そこで、子どもたちが主体的に人、自然や文化にふれ、自分の思いや考えを伝えながら自分も他者も大切に、協力し合って互いの目標を達成しようと努力する子どもの育成を図るために、交流活動を通して「豊かな心を育む活力ある学校づくり」に取り組んだ。

2 研究目的

本校は、児童数の減少に伴い、町内の小学校との統合が計画されている。このような状況の下で、特色ある学校づくりを目指すためには、まず教職員の意識改革を図ることが大切であると考え。そこで、児童の交流活動を通じた学校の活性化とともに、教職員が意欲的に教育活動に取り組むための、学校組織の見直しや学校の自己評価の在り方について考える。

3 研究方法

研究目的に迫るために、次のような方法で研究に取り組んだ。

(1) 学校の環境分析

学校の内部環境要因として強みと弱み、外部環境要因として学校に支援的に働くものと阻害的に働くものとに分け、それらによって構成されるマトリックスを基に組織を総合的に分析し、改革・改善の試行に取り組む。

(2) 交流活動の研究

本校では、「ぬくもりのある であい ふれあい まなびあい」をテーマに、生活科・総合的な学習の時間について研究を展開している。各学年で具体的な目標を設定し、子どもたちに「生きる力」を養うため、学習環境の整備や教材研究に努める。

(3) 学校自己点検表の作成

学校評価委員会を設置し、日々の教育活動の点検、改善の方向を探る。

(4) 学校組織の見直し

一人一役を基本に校務分掌を統廃合していく。

4 研究内容

(1) 学校の環境分析

外部環境要因として、地域のお年寄りの多くは本校の卒業生で、「母校の役に立ちたい」という思いをもち、学校の要請には協力的である。また、川西町と名の付く全国の自治体の中で、ネットワークが構築され、商工会や社会教育を中心に文化交流が行われている。内部環境要因としては、

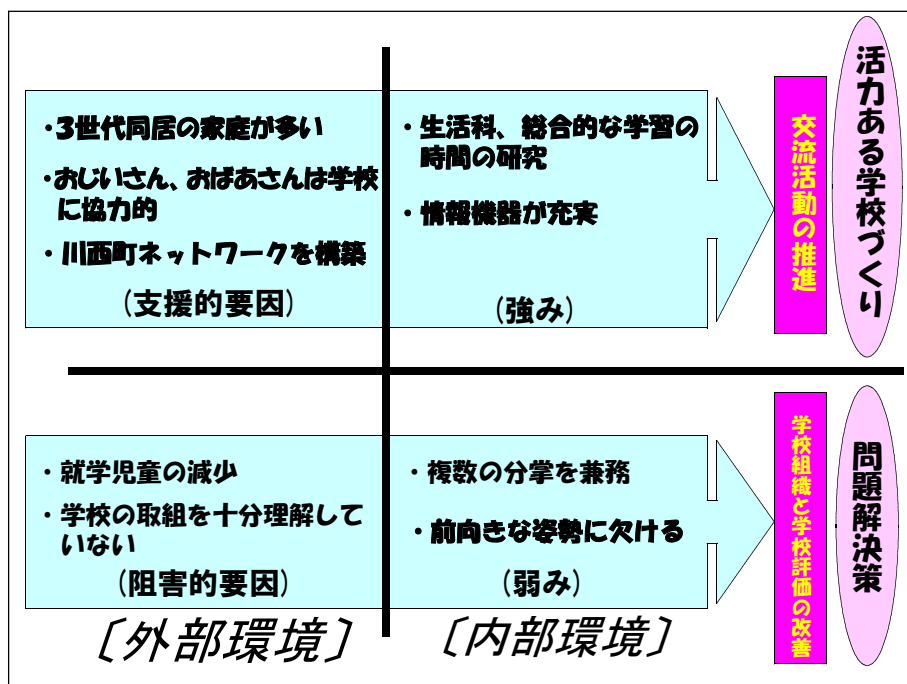


図1 学校の環境分析

各教室にパソコンとプロジェクターが設置され、教員誰もがパソコンを活用していつでも授業ができるようになった。また、全日本小学校ホームページ大賞で2年連続県代表に選ばれますます情報教育に力が入ってきている（図1）。これらの要因をうまく活用することで、交流活動を充実させ、活力ある学校づくりを目指していく。一方、教職員が意欲的に職務を遂行できるような学校組織についての改善も考える。

(2) 豊かな心をはぐくむ交流活動

本校での交流活動は大きく二つの柱から成り立っている。一つ目の柱は「であい」という活動を「戸惑う出会い」「うれしい出会い」「意外な出会い」「疑問をもつ出会い」ととらえている。また、「人と人」「人と自然」「人と土」「人と文化財」「人と産業」「人と施設」などの出会いを、

子どもが課題意識をもって追究できる出会いと考えている。

二つ目の柱は、「まなびあい」である。子ども同士、地域の人々やお年寄りから学んだ学習を、子どもたちの手から地域へ返していくことによって、子どもたちの「学ぶ意欲」を高めることができると考えている。

(ア) 野菜の配達

5、6年生が総合的な学習の時間で地域の方に野菜づくりを教えてもらい、収穫した野菜を地域の方から注文をとり配達した。この様子はNHKニュース



写真1 野菜の配達

の中で報道された(写真1)。心を込めて育てた野菜が地域のいろいろな人々に食されることで、次はどんな野菜を作ろうかという意欲が高まった。その後、開催した収穫感謝祭での収益金は新潟県中越地震被災者募金へと発展し、豊かな心をはぐくむための意義ある活動となった。

(イ) 犬川小学校との交流

川西町の姉妹町(川西ネットワーク)である山形県川西町にある犬川小学校との交流を本年度から始めた。1学期に実施した1回目の交流では、こちらから学校や学級の様子、総合的な学習の時間などについてメールを送信した。それに対して、どろんこサッカーや稲の花の写生の様子など犬川小学校の特色ある活動などが返信されてきた。



写真2 犬川小学校からのサクラランボ

2回目の交流では、写真入りの自己紹介文や趣味や特技についてメールを送った。犬川小学校からは、地域の特産物の紹介、学芸会での劇の様子、すもう大会、パソコン学習などの写真が返ってきた。その上、山形県の特産物であるサクラランボが送られてきた(写真2)。早速、試食すると、多くの子どもから「家で食べているのとは違うわ!やっぱり山形のサクラランボは、おいしいなあ。」という声が返ってきた。

3回目には、学校で作った米や野菜をお礼として送り、奈良県の風習や1年間の学校行事などについてメールも送った。犬川小学校からは、送られてきた米や野菜が学校給食の献立の一つに付け加えられたというメールが届いた。



写真3 ふれあい広場

4回目では、修学旅行、収穫感謝祭、運動会についてメールを送った。犬川小学校からは修学旅行、「犬川わっしょい」やタイムカプセルを埋めたことなどユニークな取組についてメールが届いた。

(ウ) ふれあい広場

1、2年生の生活科学習では、ゲストティーチャーに野菜づくり、押し花づくり、ゲートボールなどを教えていただいた。この時、お世話になった人たちを学校へ招待した（写真3）。来られた方々は、子どもたちが作った芋づるリース、芋版画、芋の葉を利用したコースターなどの作品や芋ケーキ、芋の蒸しパン、スイートポテトなどの料理に感心し、「学校に寄せていただいてよかった。」というお礼の言葉を次々にいただいた。子どもたちは、おじさんやおばさんに最高のもてなしをして、楽しく交流していた。



写真4 唐院音頭

(エ) 唐院音頭

3、4年生では、総合的な学習の時間に神社の歴史や地蔵のいわれを聞いていくうちに、校区の唐院で、かつて「唐院音頭」が踊られていたことを知った。その後、自治会長、町の婦人会、民謡クラブなど地域の方々の協力で、みんなが踊れるように歌詞や曲を分かりやすくして、新しく「唐院音頭」を復活させた（写真4）。そして、この「唐院音頭」を全校に広めようという気運が高まり、運動会で全校踊りとして披露することになった。これをきっかけに町文化祭への出演依頼もあり、町民の前で披露した。また、町民体育祭の演技種目にもなった。

(3) 学校自己点検表の作成

1学期に、「今なぜ学校評価なのか」について職員研修を行い、前年度の反省から学校の課題を明確化し、改善を図ることを共通理解した。2学期には学校評価委員会（校長、教頭、教務、低・中・高学年代表各1名）で、評価項目を大項目、中項目、小項目に分けて検討した。本年度は大項目ごとに学校

表1 学校運営についてのアンケート（教員用）

次の診断内容についてA～Cの該当する欄に○印をつけてください。	
1 学校経営に関するもの	
(1) 本年度の具体的目標が点検されていますか。	
A	定期的に点検され、改善されている。
B	点検されている。
C	全く点検されていない。
(2) 校務分掌の組織はわかりやすいですか。	
A	整理されていて、自分の仕事が変わりやすく動きやすい。
B	だいたい整理されている。
C	組織図が整理されていないためわかりにくい。
(3) 校務分掌の各部署が、情報交換や課題検討として位置付けていますか。	
A	2、3人で相談して企画立案ができる。
B	1人で案をたてなければならない。
C	全く話し合いができない。
2 教育活動に関するもの	
(4) 総合的な学習の時間や生活科の時間が確保できましたか。	
A	標準時間を確保できた。
B	やや時間が足りなかった。
C	全然時間が足りなかった。
(5) 生活科、総合的な学習の時間にゲストティーチャーを活用しましたか。	
A	年間3回以上活用できた。
B	年間1、2回活用できた。
C	活用しなかった。
(6) 自然体験、社会体験の学習を取り入れて指導できましたか。	
A	年間3回以上取り入れて指導できた。
B	年間1、2回活用できた。
C	取り入れて指導できなかった。
(7) 地域を教材にして授業できましたか。（生活科、総合的な学習の時間で）	
A	年間3回以上教材化して指導できた。
B	年間1、2回教材化して指導できた。
C	教材化して指導できなかった。
(8) 犬川小学校と交流できましたか。	
A	学期に2回以上メールの交換ができた。
B	学期に1回メールの交換ができた。
C	全く交流ができなかった。
(9) 地域の人々と交流できましたか。	
A	ぬくもりのある出会いやふれあい活動ができた。
B	ふれあいのある交流ができた。
C	全く交流ができなかった。
その他	

教育に欠かせない項目と重点テーマを加えた評価を考えた（表1）。ここに掲載した点検表は重点課題を解決するためのものではあるが、教員自身の自己点検についての内容も含んでいる。そして、できる限り具体的な目標値（数値による）を設定し、目標達成のための努力を導くようにした。なお、ここでの評価は、「A・・・十分達成できている」「B・・・おおむね達成できている」「C・・・ほとんど達成できていない」の3段階とした。

(4) 学校組織の見直し

校務分掌が十分整理されていないため、教職員の仕事の内容が重複していた。学校自己点検等を基に、教職員の役割分担が一目で分かり、複数で企画立案できるような校務分掌を考案した（図2）。

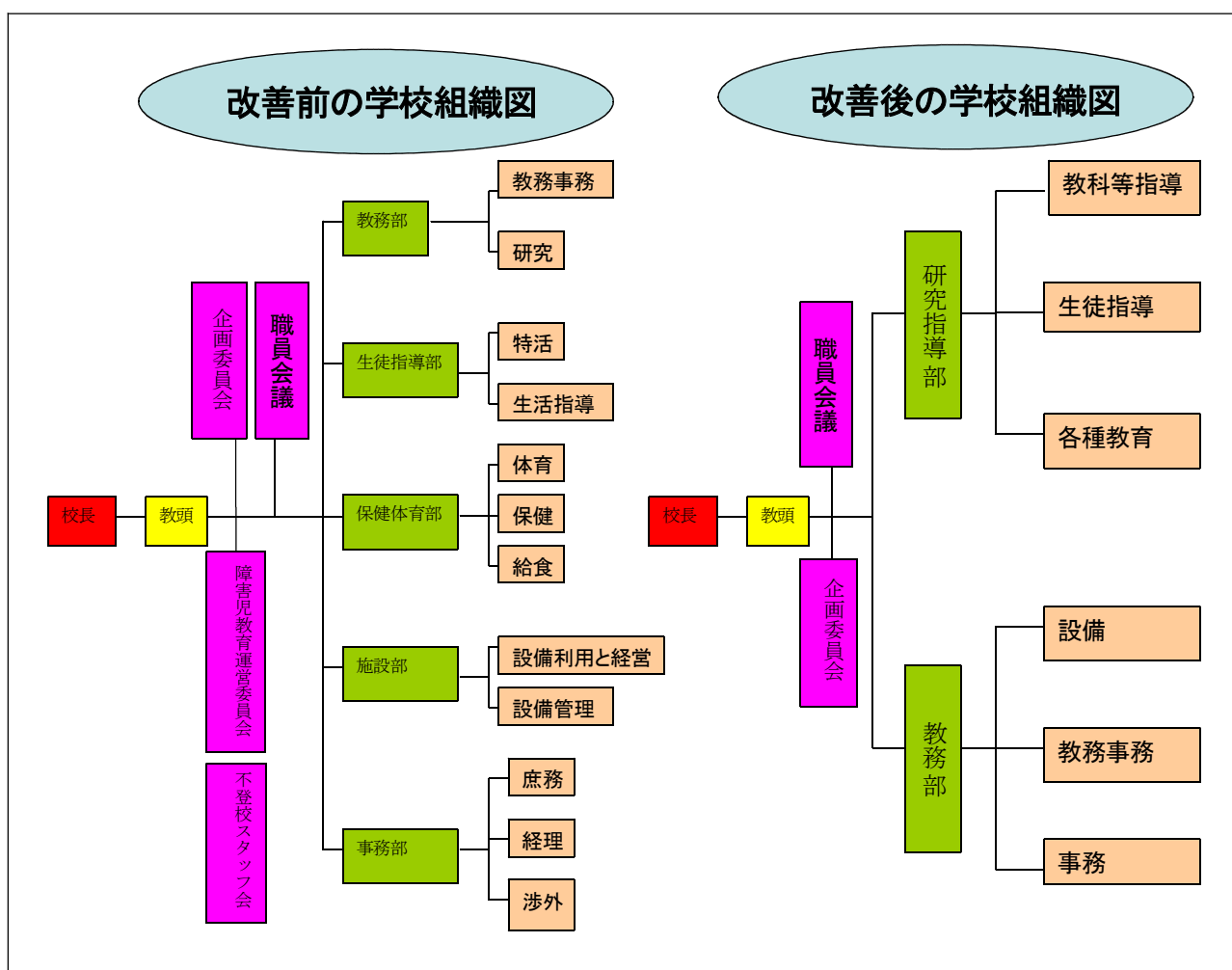


図2 学校組織図

ア 教育課程とそれを支える教育環境

教育活動と施設設備との明確化を図るために、「研究指導部」と「教務部」の2本柱で組織を編成する。「研究指導部」には、教育活動を充実させるために、「教科等指導」「生徒指導」と「各種教育」の三つの係を置く。また、現在の仕事量から考え、「教務部」「施設部」「事務部」を統合して、新しく「教務部」としてまとめ、教育計画の立案や教務事務に関する事項を中心に担当する。

イ 類似の職務や教育内容の統合

「障害児教育運営委員会」は、「各種教育」係の中で障害児教育の就学指導委員会で運営する。

「不登校スタッフ会」は「生徒指導」係に、校長、教頭、教務、養護教諭、当該学年担任を加えたメンバーで組織する。

この組織の改編によって、仕事の軽重のバランスがとれ、円滑な校務運営が期待できる。また、各部の主任と係員との連携が密になり、企画立案がしやすくなると考える。

5 研究結果と考察

地域住民、特にお年寄りの学校に対する支援で、野菜づくりの楽しさを学ぶことができ、「唐院音頭」を復活させることもできた。人やものとの交流を通して、子どもたちの郷土愛が一層確かなものになっていったと考える。また、収穫感謝祭やふれあい広場では、数多くの「うれしい出会い」を知った。さらに、山形県の犬川小学校と交流したことで、子どもたちに、自分の考えをまとめることの難しさとメールが届いたときの喜びを体験させることができた。

これらの取組によって、徐々にではあるが、子どもたちは広い視野で物事を見ることができるようになってきた。

また、学校自己点検表を作成することによって、教職員の学校経営への参画意識が高まり、それぞれの教育活動に工夫改善が見られるようになった。

6 今後の課題

学校自己評価をどのような形で公表するか、また、分析結果を具体的な形として経営計画にどのように生かし実践するか検討していきたい。また、学校組織を簡素化し、充実した活動をしていくために、更に一つ一つの活動を点検し改善を加えていきたい。

参考文献

- | | | | |
|------------|-------------------|---------|-----|
| (1) 木岡一明 編 | 「学校組織マネジメント」研修 | 教育開発研究所 | 平16 |
| (2) 八尾坂修 他 | 学校の自己点検・評価事例集 | 教育開発研究所 | 平15 |
| (3) 葉養正明 | 学校を活性化する組織マネジメント | 教育開発研究所 | 平16 |
| (4) 竹村和宥 他 | 唐院小学校（平成14年度研究紀要） | | 平14 |